

# 発電設備専門技術者 インタビュー②②

## なかがわ さとし 中川 敏氏（株式会社シンワ）



インタビューに答える中川さん

東京モノレールの流通センター駅から車で約10分、羽田空港を離発着する飛行機が間近に見える城南島海浜公園のそばに、中川敏さん（62歳）が勤務している株式会社シンワの城南工場（城南事業所）がある。中川さんは「あんまり話すことはないだよねえ」と言いつつ少し照れながらも我々を出迎えてくれた。

### 原発基礎工事での得難い経験

中川さんは昭和29年横浜市生まれ、日本大学の土木科で学び、関西の大手測量会社から内定を受けるも、親類の紹介もあり在京企業である株式会社シンワを選んだ。中川さんが入社した昭和52年当時、会社にはまだ設計部門はなく、先輩方は職人氣質の工事屋が大半だったという。

「土木、しかも測量が専攻だったからね。やっぴいけるか不安はありましたね。」

現在、自家発電設備のエンジニアリング会社として、発電設備の据付工事と共に基礎工事も請け負えることが強みとなっている会社であるが、入社当時、基礎工事の受注実績は少なかった。中川さんはその後の基礎工事の受注拡大に多大な貢献をする。

「『お前、土木かじってきたんだから、他の者より分かるだろって』って先輩には言われてましたけど」と語る。

入社後の中川さんの本格的な現場業務は、神奈川県での20トンのコンクリート製負荷試験水槽の更新工事であった。

「『水槽が傾いてしまったから見に来てくれ』って気軽に言われたんですが、既存の水槽の解体もあって4か月もかかった。職人さんに混じってブロック積みなんかもしたなあ」と当時の様子を打ち明ける。

入社5年目、27歳の中川さんに大きな業務（物件）が回ってきた。原子力発電所における、ディーゼル機関駆動発電設備の基礎工事である。当時主流であったテンプレート（型板枠）によるアンカーボルト芯出し作業である。若手ながら、土木の見識のある中川さんが主担当となった。約2か月の工期。夜は現場近くの民宿に泊まり込み図面や検査記録の作成に追われた。施工精度は厳しく、1トンの大型テンプレートをを用いながら、誤差は±1ミリ。何段階にもわたり検査があった。

「与えられた検査基準に合格するために現場は皆必死だったね。トランシットとかYレベルとかを用いて測定したり、大学の教科書も引っ張り出して業務にあたった現場だったね。」

中川さんは昭和から平成にかけ、原発の基礎工事東北・新潟・茨城各地の発電所を渡り歩いた。

### 自社一貫生産へのこだわり

原発での厳しくも得難い経験を活かし、中川さんは、基礎工事も含めた自家発電工事の責任者として実績を積んでゆく。昭和60年、大手飲料メーカーの埼玉工場における



確かな技術に裏打ちされた同社の溶接加工

ディーゼル機関常用発電設備（500kW×1台）では、土木工事と地下タンク（20,000L）の躯体工事も請け負った。

「コージェネでしたので配管工事にも苦労を要した。この頃だったかな夜間に溶接学校に通っていたのは。」

同社は基礎工事の他、配管やダクトの設計製作も担っており、プラントの「自社一貫生産」を標榜している。中川さんをはじめ、城南事業所には溶接技能者の資格を多数保有している社員がおり、プラントの内製化を促進している。近年はBCP（事業継続計画）需要もあり、地下タンクの設計施工が非常に多いという。

基礎工事のキャリアの集大成として、平成10年に行った米軍基地の滑走路照明更新工事の現場監督も記憶に残る物件だと言う。総延長3,350mの滑走路灯を約1年間の工期にて請け負った。

「夜地面を掘って照明配線を埋設し、翌朝にはアスファルトを埋め戻さなければならない。総工期は意外と長いけど、1日の工程管理は分刻みの単位。工事の進捗説明は英語だったけど、それだけは部下に任せていたね」と笑いながら振り返る。

## 教育責任者として技術者を現場に送り出す

中川さんは工事管理業務のかたわら、管理職での期間と軌を一にし、社員の教育責任者としてほぼ20年以上指導を行ってきた。「現場第一主義」を掲げる同社であるからこそ、基礎教育について注力しているという。

新卒入社した社員については、あえて現場には派遣せず、1年間事業所にて教育させるという。設計職は製図やCAD（コンピューター支援設計）の実習などを、技能系社員については、溶接技能者の資格取得に向けた実習や工具の取り扱い等を学び、研鑽を積んでいく。

キャリアを積んでゆくなかで、管工事施工管理技士などの資格取得のステップアップを図っていく。自家用発電設備専門技術者の資格取得も教育制度に組み入れられている。

「新卒を1年間事務所で教育するのはここ10年位続けています。階層別の教育も行っていますね。昔は現場責任者に1年目から預けていましたが、今はそういうことは出来ませんね。」

月に2回、総勢55名の工事部の社員を集め、中川さんは講師をしている。最近は検査での不適合事例などを説明することが多い。「私が講義する他にも、班ごとに分け討論させて発表させたり、自主性を促すための教育は色々ありますけどね。」

中川さんは、新入社員は最初の1年間で勝負の気持ちで接しているという。

「早く入社3、4年で現場責任者になれるのですが、伸び悩む人間もいたり差がついちゃうので、その様な社員にはベテランの責任者をつけて、1年間マンツーマンで教え込んだりしてますね。ちょっと気が弱い子はなかなか伸び悩んで人に使われてしまうのかな。」



工場での指導風景(中央が中川さん)

## 対応力の素早さが我々の身上

シワの執行役員兼工事部長としての重責も担う中川さん、会社の事業全般についてもリードする立場にある。

「うちは設計部門も製造部門も持っているのが強み。設備配管や支持材など自社にて製作しているから、対応力の素早さが身上。例えば保守契約を頂いている物件で急に設備の配管に穴が開いても、直ぐに社員が溶接し取り付けまで行きます。」

また、部品の内製化は現地工期の短縮化にもつながるため、出張費の削減も図れるという。

「現地での宿泊が多いと最近はや若い社員は嫌がるでしょ。労務上も有効ですね。」

最後に、最近の発電設備の施工で起きている悩みとして、装置搬入の際の問題点を挙げられた。最近ではビルなどの搬入スペースが狭くなっており、発電装置を一旦分解しないと、搬入出来ないことが多いという。

「メーカーさんの指導の下で組み上げるのですが、重量物なのでどうしてもとび工さんをお願いすることが多い。もう少し軽量コンパクトになれば、まさに我々で一気通貫で出来るんだけど、ちょっと残念ですね。」



基礎工事を中心に約40年自家発電業界に従事してきた中川さん。気負い無く柔和な表情を浮かべ、淡々と語る姿からは、長年にわたり業界と職場を支えてきた年輪を深く感じさせてくれたインタビューであった。